

はあもにいでは、男女共同参画社会の実現に向けた講座や講演会、イベントを開催しています。令和5年春に行われた主なものを紹介します。



第1回講師の澤田道夫さん



第10期ウィメンズカレッジ開講!

政策・方針決定の場に参画し、地域や職場のリーダーとして活躍する女性の人材発掘と育成を目的に開催している「はあもにいウィメンズカレッジ」。今年もさまざまな職種・年代の受講生18人が参加し、6月17日(土)から第10期がスタートしました。全9回の講座では各分野で活躍する講師から男女共同参画の現状や課題、リーダーとしての役割などについて学びます。また自分の心と向き合う講座など新しい試みも盛り込まれています。

重要なのは女性が活躍できる社会

第1回は熊本県立大学総合管理学部教授の澤田道夫さんを講師に、前半は「女性リーダーの役割について」、後半は「審議会でのコミュニケーション術」について学びました。熊本における意思決定の場において女性の割合が低い現状や人口流出の懸念についてデータを上げ、「女性が活躍できる社会をつくる」ということは我々が考えるよりもっと重要だと澤田教授。

その上で、政策や意思決定の場で女性が活躍するために、まずは行政の審議会委員に挑戦を！と審議会について説明しました。審議会には住民からの幅広い意見をもらうための公募委員の制度があり、行政も人材を探していることを伝えました。また、委員に求められること、意見の伝え方などのコミュニケーション術についても示しました。

受講生からは、「審議会のことを初めて知った」「カレッジの学びが終わったら挑戦したい」との声が聞かれました。

共感し相手を尊重する話し合いの場を

第2回は7月8日(土)に、SDGs de 地方創生ファシリテーターの熊野たまみさんによる、話し合いを導くファシリテーション講座「次の話し合いが待ち遠しくなる、話し合いの場のつくり方」を開催。「話し合いの場を作ってみたくなること」を講座のゴールに設定し、自分の考え方の傾向をチェックしたり、今までに経験した会議を振り返り、よかったこと、がっかりしたことなどをグループ内でシェア。熊野さんは実りある話し合いにするには、会議の参加者として全員が主体的に参加することが重要と話し、そうした共感型のリーダースタイルが会議を円滑にし、組織文化を変えていくことを伝えました。

後半は付箋を使ってお互いの意見をエリア分けする手法を学び、グループごとにテーマを決め話し合いの実践を行いました。その中にはグループ内全員で意見を尊重し合う「共感するリーダーシップ」を



年齢や職業、属性などさまざまな立場の方が参加

体験。受講後は、「早速、会議の場で実践したい」「会議の場で自分がどう貢献するかという視点が抜けていた。お互いを尊重することを心がけていきたい」などの感想が寄せられました。

第5回には、「地域リーダー」「ビジネスリーダー」など受講目的別に選択できる講座もあります。来年1月まで講座は続きます。受講生がお互いに刺激を受けながら地域や職場のリーダーとして成長する場となることを期待しています。

男女共同参画基礎講座

比呂美のライブ! 万事OK ~私が熊本にいる理由~

講師:伊藤 比呂美さん(詩人)



講師の伊藤比呂美さん。「大抵の悩みは、女性あるいは男性として育てられたことが歪みになって表れたものです」

5月21日(日)、詩人・伊藤比呂美さんを迎え、男女共同参画基礎講座を開催。伊藤さんが聴衆124人を前に、ジェンダーや自然の話を通して「熊本が持続可能な社会であるために、私たちがこれから考えるべきこと」について講演。また、参加者から募った悩みに答える「人生相談」も行いました。

無関心が社会の歩みを遅らせる

伊藤さんは、妊娠・出産・子育てへの本音や更年期に奮闘する姿を、エッセーとしてユーモラスかつパワフルに発信し、特に女性の共感を呼んでいます。また、早稲田大学や熊本大学の学生に、詩やジェンダーを教える他、新聞に人生相談の記事が連載されるなど精力的に活動。

現在も海外との行き来が多く、「日本はジェンダーや自然に対する姿勢が後ろ向きだと感じる。住む人の興味や関心が高まらないと社会は変わらない」と会場へ投げかけました。

5年前に熊本へ戻ってきた際も、相変わらず残る「男は男らしく、女は女らしく」という慣習に、タイムマシンに乗ってきたような気がしたそうです。娘が通ったアメリカの大学では、入学時からフェミニズムを学ぶ講義があったことや、自身も日頃から大学生とジェンダーについて意見を交わす機会も多く、日常的な感覚とのギャップは大きかったといいます。

ジェンダーの悩みにメッセージ

後半は、休憩時間に参加者に提出してもらった相談シートを使い、伊藤さんがその場で悩みに回答する時間を設けました。

20代の参加者からは他人の言葉と自分の性自認とのギャップに悩んでいるという相談内容が上がり、伊藤さんは「アメリカでは自己紹介の際に、I'm a She、I'm a They」と、自分の性を伝えるようになってきていると説明。Theyは、ノンバイナリー※を表します。「ジェンダーに足踏みしている日本でも、先に進む時が来ます。どうか心を強く持つて。相手が慣れるまでできるだけ寛容な心で指摘してほしい」と励ましのメッセージを送りました。他にも仕事や介護、親や周囲との関係などさまざまな悩みが寄せられ、伊藤さんは相談者の思いを受け止めながら答えました。



歯に衣着せぬ軽快な語り会場が笑いに包まれる場面も

盛大な拍手で締めくくられた講演会。参加者からは「人生について悩んでいたが、一つの力強い生き方を見せてもらって感動したと前向きな声聞かれました。

※ノンバイナリー 自分は男性、女性のどちらの性にも当てはまらないという人